

「つちのいえ」を通して学んだこと

村井 陽平

私が授業を履修した際、先生は何をやりたいのかは自分達で考えて提案して欲しいと仰られた。そこで私は、大学の敷地内に棚田を作りたいと申し出た。丘の上に原始的手法で作られた「つちのいえ」の周りには、その生活に纏わる畑があるべきだと考えたからである。

真夏の炎天下の中、虫に刺されないように作業服を着て、鍬で斜面を切り崩して土を耕した。作業をしていると汗が噴き出し、何で自分達はこんな事をしているのだろうかと思わずに考え、秋になると作物が実り、鳴門金時を焼き芋にした際は、感動に近い喜びがあった。また、我々を何度も阻んだ「粘土」を用いて、陶磁器を専攻する学生が食器を作ってきた際の衝撃は、今でも忘れられない。

現代を生きる我々は、完璧なまでに形状すら管理された農作物を、破格の値段で手にすることができる。しかし、そこには生産者の育てる際の苦労や、土地を開拓して土壌を作った先人達の苦難は見えてこない。先生の授業は、つちのいえを介して異なる専攻・学年の学生が集まることで多様性を知り、学生自らが主体的に活動を行う中で、現代に当たり前とされている物事に対し、考えさせるものであったのではないだろうか。

「つちのいえ」の授業は、非常に大らかである。大学の地形を変えても怒られることはなく、自身の身体を動かさず中で、物事の根本から考えさせてくれる機会を提供してくれたからだ。そして、それが許容されていた大学の環境は、豊かである。この授業は、デザイン教育においても非常に重要である。何故なら、情報化社会になるに連れて自身の手足を動かさなくても情報が容易に手に入るようになり、パソコンの中だけでデザインが完結している場面が多く見受けられるからだ。そして、そこには本来デザインにおいて極めて重要な「実体験」が抜け落ちている。経験を通して得る知見こそが、何かを生み出す上でのオリジナリティに繋がる必要不可欠な要素であり、それを教えてくれたのがこの授業だ。



2015年11月5日 村井農園での芋の収穫

2015年度参加。2016年大学院デザイン科修士課程修了。

2019年大学院美術専攻プロダクト・デザイン領域博士課程修了。

同年より、札幌大谷大学美術学科情報・プロダクトデザイン専攻専任講師